

絵本および副読本にみる  
「性交」と「経腔分娩」

——北欧と日本の表現の違い——そのⅡ

「性を語る会」代表 北沢杏子

■日本の絵本での表現

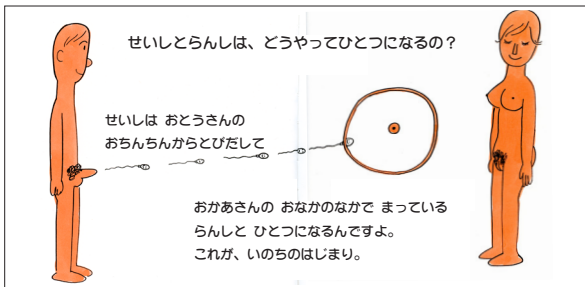
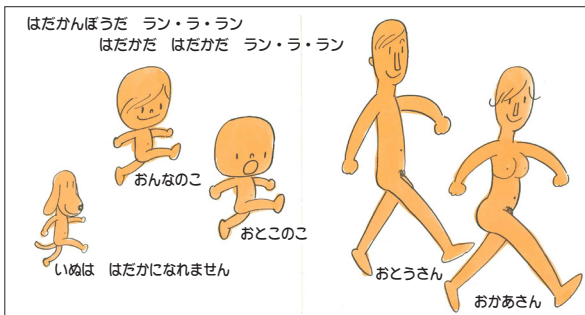
1972年、私は『なぜなのママ？—3歳からの性教育絵本—』を出版しました。

やなせたかしさんの絵で、裸のパパとママが手をつないでスキップしています。女の子と男の子が大きな声でできます。

「わたしとぼくは、どこにいたの？」。「おかあさんのおなかのなかにある、あかちゃんのもと、らんしだったの。でもらんしだけでは、あかちゃんにはなれません」。「おとうさんがもっているせいしとひとつにならなくちやあ……」



きたざわきょうこ・さく やなせたかし・え  
1972年アニー出版刊



当時、日本の社会は「性交の絵はちょっと……」といった時代だったので、こんな絵に。でもこれでは体外受精ですな(笑)。とはいえ、この絵本に日本中は大騒ぎになりました。ある全国紙の見出しには、「ついに！『性の絵本』—童画風に大胆に、他紙も賛否両論。東京・銀座のある百貨店では、この絵本の棚が「過激だ」とする人物から、ひっくり返される事件まで起きました。

■私の絵本は哺乳類の説明から——

日本では、理科の教科書とはいえ、メダカの誕生とヒトの誕生を「比べてみよう」(P1 参照)とは、どういう意図なのでしょう。せめて「哺乳類」と比較すれば、よりわかりやすいのと思えます。

「あかちゃんはどこからきたの？」  
文 北沢杏子 / 絵 井上正治 1985年 岩崎書店刊



私が書いた絵本では、はじめに人間は「哺乳類」であることを、説明しました。



「受精」と「生命のはじまり」については、次のように書きました。



どうでしょうか？ただし「交尾」の絵が、やはり、ひっかかるかもしれませんね。学習指導要領では禁じられている「性交」と同じだから。つまり、「性交」という表現は、子どもたちの性行動を助長する——というのが、日本の教育の主張なのです。

この絵本の続きは、「人間も哺乳類でしたね。だから、あかちゃんをつくるときは、お父さんとお母さんは しっかりだきあって……」と書きました。すると営業部から、「こんな、重なっている絵は、(営業としては) 売れないから、ふとんをかけたれ」って。私は、「ふとんをかけるなら、作者として、出版をやめていただきます」って、さんざん論争して、妥協策として薄い布団が掛けてあります(笑)。



この「ころからだいのちのえほん」シリーズは、①おかあさん ②おとうさん ③あいしあう動物たち ④あかちゃんはどこからきたの ⑤女の子 ⑥男の子 ⑦あなたがうまれるまで ⑧生きること愛することの全8巻に仕上げました。子どもの発達段階に応じて、両親や先生と一緒に読んでくださるといいですね。

さあ、日本と北欧の「性教育のあり方の違い」について、おおいに討論しましょう！